

〔令和二年度研究会活動報告〕

モンゴル佛典研究会

研究会代表 阿部 真也

本研究会は、モンゴルの仏教について様々な角度から研究する事を目的としています。現在は、二〇一七年八月の遼寧省瑞応寺調査によって研究会メンバーが発見した新たな『モンゴル仏教史』の写本の内容と価値を明らかにするために、そのローマ字転写・翻訳をおこなっています。ただし、本年度については、オンラインならではのメリット（例えば普段参加できないメンバーも参加できる）を考え、順番に一人ずつ発表をする形を取りました。これまでの研究会の成果は、「大正大学総合佛教学研究年報」の第十八号（平成八年三月）、第十九号（平成九年三月）、第二十号（平成十年三月）、第二十一号（平成十一年三月）、第二十二号（平成十二年三月）、第二十三号（平成十三年三月）、第二十四号（平成十四年三月）、第二十五号（平成十五年三月）、第二十六号（平成十六年三月）、第二十七号（平成十七年三月）、第二十八号（平成十八年三月）、第二十九号（平成十九年三月）、第三十号（平成二十年三月）、第三十一号（平成二十一年三月）、第三十二号（平成二十二年三月）、第三十三号（平成二十三年三月）、第三十四号（平成二十四年三月）、第三十五号（平成

二十五年三月）、第三十六号（平成二十六年三月）、第三十七号（平成二十七年三月）、第三十八号（平成二十八年三月）、第三十九号（平成二十九年三月）、第四十号（平成三十年三月）、第四十一号（平成三十一年三月）、第四十二号（令和二年三月）に掲載されています。また、大正大学総合佛教学研究所の助成金によって、『モンゴル佛教史』研究〔一〕（二〇〇二年六月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究〔二〕（二〇〇六年五月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究〔三〕（二〇一一年三月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究〔四〕（二〇一五年三月、ノンブル社）、『モンゴル佛教史』研究〔五〕（二〇一九年三月、ノンブル社）の五冊を出版しました。では、本研究会の研究内容の一部について紹介します。

旧『モンゴル佛教史』のモンゴル語版における問題点としては以下のものがあります。まず、外来語を表記するために作られたモンゴル語アリガリ文字やテクニカルタームを巡るものです。テクニカルタームのモンゴル語表記（あるいは訳）については、モンゴル語・チベット語アリガリ表記、サンスクリット還元アリガリ表記など様々な表記が見られます。その中にはある一定の傾向（あるいは法則）があり、それがこの文献の性格等を推測する手がかりになるものと思われれます。また、人名等の音写語に異なる表記

が非常に多くある、という問題もあります。次に、異なる写本の存在の可能性です。チベット語版、あるいは翻訳との比較により、一致しない記述が時折出て来ます。確認を必要とする所です。

これに対して、新『モンゴル佛敎史』は、現時点ではチベット語の文献等関係する文献は発見されていません。内容は、旧写本と重なる部分もあります。表記上の問題は、現時点で幾つか出てきているものがあります。例えば、現代語表記と異なる表記が規則的にされている、満州語の表記の影響がある、等です。分量としては一〇七葉であり、旧写本の半分弱です。まだ、検討を始めたばかりですが、抄訳本である可能性もあります。旧写本と比較しつつ、検討しています。

本年度の主な研究会の活動

- ・ 随時、オンライン研究会（Zoom使用）
- ・ 日本モンゴル学会に一部のメンバーが参加（春季はコロナのため中止。秋季、20・11・21大阪大学箕面キャンパス）

今後の予定

毎週火曜日…17時～19時位、研究会。ただし、状況によっては、オンラインにて開催。

場所…未定

「大学と宗教」研究会

研究会代表 松野 智章

本研究会は、「大学と宗教」を研究テーマとして掲げ、平成二二年四月に発足した研究会であり、今年度で第四期の一年目（一期三年）を迎えた。

研究進捗情報を報告し合う研究会を随時開催してきたが、コロナウイルス感染症の蔓延、これに伴うオンライン授業への移行等の緊急対応をうけ、潤滑な研究活動は望めなかった。

まず、令和二年二月二七日に立正大学に於て、

- ① 宮坂清先（名古屋学院大学）「ラダック（カシミール東部）におけるチベット人コミュニティの宗教教育と僧侶養成について」
- ② 矢野秀武（駒沢大学）「タイにおける教育制度と僧侶養成について」
- ③ 桜井啓子（早稲田大学）「イランにおける教育制度とウラマー養成について」
- ④ 藤本頼生（國學院大学）「戦後日本における神道系大
学と神職養成―神社新報記事の分析にみる―」

右記の研究報告会を予定していたが、やむなく延期し

た。あらためて令和三年二月二七日にオンラインにて開催予定である。

次に、令和二年中に刊行予定であった『シリーズ大学と宗教Ⅲ 現代日本の大学と宗教』（法蔵館）も延期となった。各執筆者による校正（第三校）、編者による最終確認は既に終了しており、年度末までに刊行予定である。

本研究会は、基本的にJSPS科学研究費による助成研究と連動して研究活動をおこなってきた。二〇一〇～二〇一一年は、若手研究B「近代日本の「宗門系大学」における僧侶養成と学術研究に関する実証研究」〔代表：江島尚俊（大正大学）〕。二〇一〇～二〇一四年は、基盤研究B「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」〔代表：大谷栄一（佛教大学）〕。二〇一四～二〇一七年は、基盤研究B「戦時下・宗教系大学における宗教研究と宗教者養成に関する実証的研究」〔代表：星野英紀（大正大学）〕。二〇一六～二〇一九年は、若手研究B「大正期の大学行政と宗教系大学昇格背景に関する実証研究」〔代表：江島尚俊（田園調布学園大学）〕。現在、基盤研究B「新制大学制度における宗教関連の学問・養成・資格に関する多角的研究」〔代表：林淳（愛知学院大学）〕の助成を受けている（二〇一八～二〇二一年）。

つづけて大学制度上における宗教系大学・宗教関連学問・宗教者養成の国際比較を目的とした研究を企画していたが、諸般の事情により中止。今年度末をもって「大

学と宗教」研究会としての活動を終える予定である。
およそ一〇年にわたる研究活動において、『近代日本の
大学と宗教』（二〇一四）、『戦時日本の大学と宗教』
（二〇一七）、『現代日本の大学と宗教』（二〇二一予定）を
上梓し、新たに開拓した「大学と宗教」という研究領域
も定着をみた。

あらためて、ご執筆頂いた各先生に感謝申し上げますと
ともに、ご厚意を賜った大正大学総合佛教研究所、歴代
の所長・主任研究員・事務職員、ご指導くださった廣澤
隆之先生、村上興匡先生、ご助言くださった星野英紀先生、
星川啓慈先生に深謝申し上げます。

室町期における諸宗兼学仏教の研究

研究会代表 大橋 雄人

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）の思想研究を行っている。

澄円は、八宗の教義に通じ、入元して廬山東林寺に登り、白蓮宗の優曇普度に慧遠流の浄土教を学んだ人物である。澄円は横尾山で三部の密灌を受け、南都で登壇受戒し、天台の承遍（檀那院流）・観豪から天台教を学び、浄土教は九品寺流、鎮西流の相伝を受け、禅宗では虎関師錬との交流が確認でき、諸宗の教義を遍学していたことが知られる。また、南朝の後村上天皇の帰依を蒙り、南朝の為に奔走している。それ故、中国元代仏教の日本への影響や皇室と仏教者との関係等、南北朝期の仏教に関する新しい研究が進むことが期待されるテーマでもある。具体的には、これまで一度も活字化されていない貴重書である澄円『浄土十勝論』『同輔助義』の書誌的整理をはじめ、著者澄円伝の研究、『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を行っている。澄円『浄土十勝論』『同輔助義』に関する先行研究は非常に少なく、思想史研究、書誌学研究、伝記研究のどの分野においても、これまでほとんど行われてきていない。そのため、本研究会参加者がそれぞれの問題

意識のもと個別に研究を進めている。

平成二九年度までの共同研究では、翻刻・書き下し文・語注作成を行っていたが、作業速度の効率化を図り、平成三〇年度以降、第三巻より書き下し作業のみとし、注も出典の確認のみとした。本年は作業を分担し、『補助義』を除いた全一四巻の書き下し作業を終了した。なお、本『年報』には紙数の都合上、巻上坤中（第五巻）の書き下しを中間報告として掲載した。

次年度の共同研究では、引き続き書き下し作業を進め、個人研究についても精力的に口頭発表や研究論文の発表を行っていきたくと考えている。また、これまでに行ってきた研究作業データを再整理し、全体の成果報告に向けた準備も順次進めていきたい。

〈参加メンバー〉

代表者	大橋 雄人
参加者	吉水 岳彦 郡嶋 昭示 舍奈田智宏 工藤 量導 岩津 英資 杉山 裕俊 長尾 隆寛 安孫子稔章 勝崎 裕之 後藤 史孝 春本 龍彬 星 俊明 青木 篤史 長尾 光恵 里見 奎周 峯崎 就裕 小笠原紀彰

中世東国仏教研究会

研究会代表 大八木 隆祥

当研究会は中世東国仏教の実態解明を目的に発足したものであり、称名寺所蔵・神奈川県立金沢文庫管理、国宝・称名寺聖教の写本『仙芥集』（二三函―一―（三三）の翻刻を進めてきた。

『仙芥集』は鎌倉時代の真言僧である定仙（一二三三―一三〇二）の受法記録を、定仙の弟子である智照がテーマごとに編集したものである。

当研究会では昨年度『仙芥集』全三三三点の翻刻を完了し、そのすべては『綜合佛敎研究所年報』三六・三七・三八・四〇・四一・四二号誌上においてすでに掲載済みである。

以上の成果を踏まえ、本年度は次の段階、すなわち出版に向けての準備作業を進めた。

まず、これまで発表した翻刻本文について、原稿データと数度の校正を経た掲載版とを対校し、また発表後に発覚した誤字・脱字等の反映、発表年次により若干異なっていた書式の統一等、原稿データの修正を行った。

また、『仙芥集』に記された膨大な人名を一覧化・人名辞典化するため、人名を網羅的に採集し整理する作業を行った。採集については特に問題なかったが、これを整理する段階にいたると、実名・仮名・通称・異名・改名など多

岐にわたり、また、その名前が誰を指すのか、新規の人名なのか、既出の人名と同一人物なのか等、判断が難しいものも多々あり、現在もその作業は続いている。

これら人名については、辞典類・先行研究・史料を調査し、それらを基に略歴を作成し、単なる一覧や人名索引ではなく、簡潔ながら人名辞典としての性格も併せ持たせられるよう作業を進めている。現在は重要人物、頻出する人物、定仙と関係の深い人物に限っているが、段階的に範囲を広げ、すべての人名に略歴を記す予定である。

なお、本年度は新型コロナウイルス流行の影響により対面での研究会開催を断念し、すべての作業は参加メンバー各自に割り振り、その成果を代表の元に集約する形で行った。

仏教文化におけるメディア研究会

研究会代表 森 覚

昨年度、仏教文化におけるメディア研究会では、第一期活動ならびに第二期活動の研究成果となる論文集『メディアのなかの仏教―近現代の仏教的人間像』を東京都千代田区神田神保町の勉誠出版より刊行した。

この論文集は、二〇二〇年三月三十一日に刊行されたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い発令された緊急事態宣言を受け、五月下旬に書店販売が開始されることとなった。そのような発売スケジュールの遅延にも関わらず、二〇二〇年七月二日付の「週刊仏教タイムス」を皮切りに、日本ルイス・キャロル学会ホームページ、八月三十一日刊行の『怪と幽』第五号(KADOKAWA)といったメディアで、本書をご紹介いただいた。また十月に入ってからには、表象文化論学会のニューズレターであるREPRE四〇号において、研究代表の森による書籍紹介が公開された。加えて、出版元である勉誠出版には、宣伝活動へ力を注いでいただき、「週刊仏教タイムス」「朝日新聞」「京都新聞」「週刊読書人」「東方」に本書の広告記事が掲載された。

今後は、武蔵野大学准教授の碧海寿広氏に執筆していただいた書評が二〇二二年五月刊行の日本近代仏教史研究会紀要『近代仏教』第二八号にて発表されることになってお

り、同じく三月刊行予定の絵本学会研究紀要『絵本学』でも本書が紹介される予定である。

一方、研究会の活動状況については、コロナ禍により大正大学キャンパスへの入校制限措置が取られたため、二〇二〇年五月一五日の第一回研究会から二〇二一年一月二二日の第一三回研究会までの全てをZoomによるオンライン形式で開催した。五月から九月にかけては、主に論文集の販売開始にあわせ、書籍紹介の執筆や、書評への対応を行なった。

しかし、仏教文化におけるメディア研究会は、令和二年度をもって第二期活動に区切りがつくため、研究分担者と協議し、八月末からは、次年度の研究活動継続に向けた準備をあわせて取り組んだ。

その第一歩として、九月一九日一七時より、仏教文化におけるメディア研究会と、三浦周氏(大正大学)の日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C) 科研番号一八K〇〇〇六四「近代仏教学は「トランスナショナル」なのか―皇道仏教・戦時教学に関する基礎的研究―」との共催企画として、オンライン公開研究会「仏教とメディア表象」を開催。研究代表の森が「明治十五年の草双紙「開化地獄論」―啓蒙主義と仏教―」と題して発表、三浦周氏が司会を務めた。当日は、日本宗教学会第七十九回大会の開催期間と重なったが、嶋田毅寛氏、猪股清郎氏、渡辺隆明氏(大正大学)、大澤絢子氏(大谷大学)、高橋洋子氏(法

政大学、渡辺賢治氏（福島工業高等専門学校）、今井秀和氏（大東文化大学）、近藤俊太郎氏（本願寺史料研究所）、ユリア・ブレニナ氏（大阪大学）、田中ひろみ氏（仏像イラストレーター）に参加していただいた。

また、京都にある法蔵館書店からの協力を得て、次年度第三期の研究計画を策定。現在、大正大学総合佛教研究所に学術助成を申請しているところである。仏教文化におけるメディア研究会は、二〇一三年の設立当初よりメディアに表現された仏教文化を論究対象としてきた。その路線を継続する第三期では、近代仏教研究の観点から、「近代日本における仏教とメディア」を軸として、江戸末期から昭和期にかけての書物・図像・映像・音響メディアにより生み出された仏教表現の成り立ちと仏教との関係性を考察したい。それにより、江戸末期から近代のメディアを通じ、仏教のイメージが人びとにいかに関与され、共有されたのかを明らかにし、さらには、娯楽性を帯びつつ表現された仏教が人びとの心理や思考、行動へ与えた影響についても検討する。

今後も適時、オンラインと対面での研究会を開催し、中間報告や討議を通して、研究内容の充実を図りたいと考えている。

梵語仏典研究会

研究会代表 安井 光洋

本研究会は、大正大学の伝統的な梵語仏典研究を受け継ぐ研究会として、平成二十八年度より従来の「声聞地研究会」・「律経研究会」・「サンスクリット修辞法研究会」という三つの研究会を一つに統合して始動した。これら三つの研究会の実体は研究グループとして保持しつつ、グループ間の行き来を自由にして研究者の活動の幅を広げることで伝統的学問の継承とさらなる発展を目指して研究活動に取り組んでいる。各研究グループは引き続きの内容として次の研究活動を行った。

まず声聞地グループ（昭和五十四年度より共同研究を開始）は、第一瑜伽処から第四瑜伽処までの全四章からなる『瑜伽論声聞地』の校訂テキストと訳註を作成している。本年度声聞地写本 Ms121a1L から 122a1R までの箇所についてのシユクテキストとの比較検討、ならびに 121a5M までの漢訳、チベット語役との対照作業、下訳作成作業を進めた。声聞地グループは、研究会参加者の状況変化や新規研究員の加入がなく、またコロナウイルスの影響のため研究会の開催が少なくなった。訳注作業では、写本の記述と漢訳やチベット語訳が合わない箇所もあり、時間を要している。あわせて第一から第三瑜伽処との比較検討作業も行った。

ており、訳文の統一などについての精度が上がっている。しかしながら、その作業に時間を要することもあり、どこまでこの作業を重視するかは今後の検討課題である。残す年度内に全体での検討を少しでも多く重ね、校訂研究を進展させていく予定である。

次に律経グループ（平成十四年度より共同研究を開始）は、平成十三年に出版された『チベット・ウメ字転写梵文写本集成影印版』に含まれる『律経』および『律経自註』写本の解説を進めている。昨年度末からは The Third International Workshop for Gunaprabha's Vinayasūtra の開催に向けて準備を進めていたが、コロナウイルスの影響により世界各国から律研究者を招聘するのは困難であるため、今年度の開催を見送った。そのため律経グループの活動としては、国内外で律を研究している研究者たちと個別に情報を交換するにとどまった。

最後に修辞法グループ（平成十九年度より共同研究を開始）は、全五章からなるウアーマナ（Yamana）著『詩の修辞法の手引・註（Kāvyaśāstrakāraśāstravṛtti）』のローマナイズと訳註を平成二十四年度より順次、当研究年報に発表してきた（第一章〜四章）。「詩作への」使用について（prāyogika-）と称する第五章は、二つの課から成り、全一〇九のストラから構成される。一七のストラから成る第一課は「詩の慣習（Kāvyaśāstranaya）」を主題とし、九二のストラから成る第二課は「言葉の正確化（śabdāsuddhi-）」を主題

としている。第五章については一通り読了したが、本章を正確に解読するには文法学の知識も要するため、パーニ二文法に関する先行研究も併読している。そのため、現時点では和訳の公表には至っていない。尚、本年度はこれと並行して、カーリダーサ (Kālidāsa) 著『ラグの系譜 (Rāghuvamśa)』をマッリナータ (Mallinātha) による註釈と共に読み進めている。マハーカーヴィヤ (mahākāvya) の中でも最も人気を博した作品と言える本書の読解を通じて、どのような修辭法が用いられているかを検証している。こちらについては、多数の先行研究が存在するため、それらを参照しつつ、本年度は第一章を解読してきた。サンスクリット修辭学に関する研究は、サンスクリット文献の厳密な解釈ならびに翻訳法の確立にも役立つことがこの一四年間の共同研究から判明しているので、インド・アールヤ語の原典を扱う幅広い分野の研究者に積極的な参加を呼びかけるものである。尚、本研究会においても、今年度に発令された緊急事態宣言に伴いインターネットを通じたオンライン研究会が定着しつつあるため、参加者の地理的制約が解消したことは従来と比較して好ましい点であった。

密教聖典研究会

研究会代表 駒井 信勝

本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、総合仏教研究所に集まって研究会を開催することが困難な状況であった。四月に緊急事態宣言が発令され、今年度の研究活動をどのように行うのかが課題となった。今回は、どのように研究会を行ったかという活動形態と、具体的にどのような活動をしたかという研究内容の二点について報告したい。

〈活動形態について〉

今年度の研究会は、総合仏教研究所で開催することが困難なため、オンライン会議システムのズームを使用することとした。それに伴い、研究費を使用し、研究会メンバーのオンライン環境を整えた。

開催は不定期であったが、今年度は六月から一月の間で九回開催した。

〈研究内容について〉

当研究会では、『理趣広経』の校訂テキスト作成とその読解を行っている。現在は前篇の「般若分」(Sriparamādya-nāma-nahāyānakalparāḥ)の校訂テキストの報告が終わわり、後篇の「真言分」(Sriparamādya-mantrakalpakhaṇḍa-nāma)

の校訂テキストの作成をしている。

研究会では既に「真言分」の第八章まで読み進めているが、今年度はオンラインでの開催であること、そして当初参照していなかったプラク版を加えたことから、「大楽金剛秘密」第一章の再検討をすることとした。

この研究成果は、『Sriparamādyamantrakalpakhaṇḍa-Mahāsuḥādevīragūrya Ch.1』として『大正大学総合佛教研究所年報』第四三号に報告する予定である。

今年度の研究会は、従来とは違う開催形態となったが、新たに大正大学大学院博士後期課程のメンバーが二名研究会に加わった。今後さらに研究会活動を充実させて、その成果を報告していく所存である。

仏教史料研究会

研究会代表 石井 正稔

当研究会は歴史学の立場から古文書や古記録といった仏教関係史料を取り扱い、研究を進めることを目的とした研究会である。

研究会メンバーは次の八名である。

- ・石井 正稔（総合仏教研究所研究員 代表）
- ・濱田 由美（総合仏教研究所研究員）
- ・上條 駿（総合仏教研究所研究生）
- ・櫛田 良道（大正大学専任講師）
- ・藤田 祐俊（大正大学講師）
- ・風間 弘盛（真言宗豊山派宗学研究所研究員）
- ・熊野 秀一
- ・加瀬 丈舜

主な活動内容は、平成二八年九月に調査を実施した真言宗豊山派金乗院（千葉県野田市清水）の史料調査および内容の整理作業を進めている。

金乗院は、応永五年（一三九八）の開基と伝えられ、近世期には本寺と檀林の寺格を有し、近隣寺院を統括していた。そうしたことから、同寺には、檀林・本末関係などを

示す史料群が多く残されている。同寺の蔵には古典籍を含む史料が多く収蔵されているが、これら金乗院所蔵史料は市史や県史などにも収められておらず、未整理の状態である。

活動内容として、引き続き『大衆帳（交衆帳）』に着手している。

研究会の立ち上げ当初より着目していた史料の一つである『大衆帳』は、文政年間（一八一八～一八三〇）の本山との交衆に係るもので、論議（報恩講）が実施される度に作成された名簿である。一覧すると、法麁の浅い者が年を重ねる毎に上座へと昇っていき、やがては名簿上から名前を消していることがわかる。同様に、上座にいて名前が消えた者でも、一定の期間を経ると再び名前が記載されており、そうした内容から金乗院を拠点とし在地において活動した僧侶の様子を垣間見ることができる。

まず、作業として『大衆帳』のデータ入力を研究会メンバー全員で分担しておこなってきた。担当者および担当箇所は次の通りである。

- ・石井 画像データ No.537～570
- ・熊野 画像データ No.571～618
- ・濱田 画像データ No.619～658
- ・加瀬 画像データ No.659～696
- ・久保田 画像データ No.697～737
- ・風間 画像データ No.738～764

・藤田 画像データ No.765 ～ 790

・櫛田 画像データ No.791 ～ 808

入力作業は既に終了しており、データを統合しメンバー全員での解読できなかった文字を読み説いていく等の確認作業をおこなっている。

石井・熊野が担当したデータの確認作業まで一旦終了し、紙面掲載の準備を進めている。準備するにあたり、入力したデータの凡例等を定めること、そして『大衆帳』自体の書誌的概要を調べる必要がある。

しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、研究会の活動が満足にできない状況であった為、これまで作業してきた『大衆帳』の翻刻箇所を各自で再確認する作業のみに留まっている。

次年度は、早急にそれらの問題を解決し、年報等の紙面に掲載し、成果として発表できることを目指していく。

更に、取り扱っている史料の性質上、寺院の本末関係・檀林制度・移転寺制度といった近世新義真言宗史の実態についての理解を深めておかなければならない必要がある。そうした知識の向上を図りながら研究会を進めていきたい。

頼瑜撰『真俗雜記問答鈔』 訳注研究会

研究会代表 小宮 俊海

『真俗雜記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中院俊音房頼瑜僧正（一二二六～一三〇四）が、その時々々に記したものを集成した著作である。その内容は一千三百二十余条にのぼり、書名のごとく真言密教や仏教諸宗に関わる事項はもとより、頼瑜自身の夢記や和歌、さらには公家に対する修法や諸家との書簡、和歌論や世典に関する記事など、その内容は実に多彩である。一人の真言僧侶による教学的著作の域を超え、中世を生きた頼瑜の人物像、さらには当時の宗教文化や社会状況までをも窺い知ることのできる貴重な資料といえよう。

本書は古来より三十卷・二十四卷・十一卷など種々の説があり、また写本によって巻順の移動や内容の増減が著しい。すでに『真言宗全書』第三十七卷に、高野山南院松永有見師蔵写本を底本とし、二十七卷本の体裁をもって活字化されているものの校訂テキストとして未だ不十分とされる。

そこで本研究会は各所の諸写本を聚集し校訂し、なかでも巻数の揃った最も古い写本である、智積院新文庫蔵本を底本として【本文】を作成し、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施している。

今回報告するのは、新文庫蔵本全二十五冊のうち、整理

番号・新文庫三一―四―（二五―）に相当する一冊の中間部分（一〇丁裏～二三丁裏）である。本書は、外題に「真俗雜記卷四」とあり、内題は「秘蔵口伝鈔第四」とある。これらも勘案し、本書を「巻第四」と定め、今回報告する中間部分を仮に「巻第四ノ三」とした。

巻第四ノ三に収録される条目は次の通り。

- ・ 八六 真宗草木成仏秘蔵記中具明事
- ・ 八七 釈論意可許草木成仏歟事

本年度は以上、二つの条目について各担当者振り分け、本文校訂ならびに訳注研究を進めることができた。次年度以降、引き続き訳注研究を進め、「巻四ノ四」を順次発表刊行予定である。

近世唱導文芸研究会

研究会代表 平間 尚子

本研究会は、大正大学図書館に所蔵される近世の唱導関連文献を対象として、翻刻を行ない、唱導資料の読解、および引用された文献資料の流布や展開などを研究している。

研究会における当面の目標は、『類雑集』を広く学界に紹介し、また翻刻などを通じた研究成果を報告することである。

『類雑集』は、近世に編纂されたと考えられている唱導資料で、版本は、つぎの二点がある。

一点目は、「慶安四年（辛卯）曆十月吉辰 石黒庄太夫板本」の奥書を有するもので、二点目は、「明暦三年（丁酉）三月吉辰 秋田屋平左衛門板行」の奥書を有するものである。どちらも、全十巻および総目録一冊の計十一冊で、同じ版木を用いて刷られている。版本は、大正大学以外にも所蔵されているが、翻刻はなされていない状況にある。このように、活字化されていない『類雑集』の翻刻作業を行ない、その出典を明らかにすることは、唱導分野の研究の進展にも寄与できるといえよう。

本研究会では、平成二十三年度から『大正大学総合仏教研究所年報』に、一巻ずつ翻刻を報告してきた。また、翻刻作業と同時に、引用文献の調査ならびに校合を実施している。翻刻掲載時には、脚注に典拠名と校異を示した。また、資

料の状態を忠実に再現するために書き入れの場所や内容についても詳細な指摘をしている。

今年度は、総勢八名の会員を中心に研究会を運営し、『類雑集』研究の総まとめとして、巻一〜巻四の出典未詳箇所の再調査を行なった。

昨年度まで十年間に渡り、大正大学大学院国文学専攻の出身者を中心に、『類雑集』の翻刻を行ない、引用された文献資料に注目して、『類雑集』の生成とその用いられた状況について共同研究を進めてきた。

また複数のメンバーで、寺院における『類雑集』の流布の一端を確認するため、版本や写本等の調査の機会にも、恵まれた。

『類雑集』や『類雑集』の影響が認められる資料を手にとれたことで、どの寺院で、どの時期に、どのように資料が用いられたのかを知ることができたことは、またとない貴重な機会となった。

『類雑集』は、国文学者において、以前より資料的価値が認められていたにもかかわらず、活字化がされていないことにより、研究が俟たれている状況にある。

先学により『類雑集』は日蓮宗関係寺院圏内で用いられていたことが指摘されている。そのような指摘を参考にしつつ、徹底して資料を読み解くことで、『類雑集』をはじめ近世における唱導書のあり方の一端を紐解くことが期待できると考えている。

来年度は、『類雑集』研究の総まとめとして、『類雑集』巻五の十の出版について、未詳箇所となっている点を再検討したい。さらには、踏査で得られた成果も含めて、『類雑集』の総合的な研究の報告を行なっていく所存である。

大乘經典思想研究会

研究会代表 伊久間 洋光

(概要)

本研究会は、大乘仏教における最も重要なテキストの一つである大品系般若経のうち、古形を保ちながら未だ全体の研究がなされていなく Gilgit 写本般若経について、全体の transliteration の公開を中心とする総合的な説明を目指す。既に校訂のなされた大品系般若経のサンスクリットテキストにはネパール系『二万五千頌般若』があるが、後世の論書の影響を受けて構成を改変されており、完全に古形を留めているとは言えない。然るに本研究会において、論書の影響を受けていない大品系般若経である Gilgit 写本般若経の全体像を解明することで、大品系般若経の古形が初めて明らかになる。そのことから、本研究会の成果は、『大智度論』の注釈対象である鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』を始めとする、大品系般若経の漢訳諸本の新たな研究基盤となる。さらに本研究会では、Gilgit 写本般若経の transliteration に際し、未だサンスクリット写本校訂の終わっていない『十万頌般若』の漢訳・チベット語訳の並行箇所のリケーションを付す。そのことにより、本研究は、将来の『十万頌般若』校訂も視野に入れた拡大系般若経の包括的研究となる。最終的には Gilgit 写本般若経全体の transliteration を出版する。

また本研究会はプラーフミー写本 (Gilgit/Bamyan Type I, 丸形グプタ文字) を読む貴重な機会であり、写本研究に関心のあるメンバーの参加を期待する。

(進捗状況)

令和二年十月よりオンライン研究会を開始し、毎月二回定期研究会を行っている。

役割分担として、鈴木健太教授・宮崎展昌准教授・張美橋氏が並行箇所の大品系諸漢訳の読み・句読点を、庄司史生准教授がチベット語訳二万五千頌・一万八千頌のデルゲ版テキストを提示する。また玉井達士博士が用意した transliteration に基づき、伊久間が読みの提示・スクライバルエラー修正等を行い、定期研究会で写本プレートと合わせ全員で検討している。また Google Spreadsheet を用い、当該写本とネパール系二万五千頌、十万頌、諸漢訳、上記チベット語訳の対照表を作成している。

当該写本の冒頭部は Stefano Zacchetti 教授が fol.1-27r 迄の transliteration を公開している。これは空法護訳の第一三章に相当する。今年度、本研究会では Zacchetti 教授が公開した箇所の後、空法護訳の第四章に当たる fol.27v-38v の transliteration を「Gilgit 写本 Larger Pṛajñāpāramitā の翻刻研究」として『大正大学綜合佛教学研究年報』第四三号に報告する予定である。

